

一、「戦争の子ども」のトラウマ

本論は、私たちが実施した「戦争の子ども」プロジェクト⁽¹⁾の経験を踏まえて、「戦争体験の聞き取り」の方法や特質⁽²⁾、そして「トラウマ記憶」の扱いに関して若干の考察を加えることを目的とする。

「戦争の子ども」という言葉は、「ドイツ語の Kriegskind の訳語であり⁽³⁾、本研究が、ドイツ、ミュンヘン大学 (Ludwig Maximilian Universität) で行われた「戦争の子ども時代 (Kriegskinder)」研究プロジェクトとの連携によって始まったことに由来する (森・港道、二〇二二)」。ドイツにおいては、二〇〇三年にミュンヘン大学の精神科医、ミヒヤエル・エルマン (Michael Erman) が Kriegskind を自らもそこに所属する世代を指す言葉として使ったのを皮切りに、第二次世界大戦下で子ども時代を過ごした世代が主題化されることが増えた。ドイツの文脈を離れてさらに大きな視野から言えば、戦争や武力紛争が子どもに及ぼす影響は、今日重大な問題として主題化されている。日本においても、第二次世界大戦中ないし戦後期の子ども自身による作文、成人後の回顧録、ジャーナリズム等、戦時下の子どもがメディアに取り上げられる機会は多いが、歴史学にせよ心理学にせよ、学問的探求の対象として主題化されることは少ない。

本論の目的はしかし、プロジェクトの全体を報告することではなく、また「戦争の子ども」全般に関する理解を深めることでもなく、冒頭に述べたように、聞き取りの方法と「トラウマ記憶」の扱いに絞って検討することにある。したがって、「トラウマ記憶」の観点からの考察は、同種の記憶を含む戦争以外の体験の聞き取りにも通じるであろう。「トラウマ記憶」の聞き取りは、極めて強い否定的な情動、感情 (恐怖、怒り、罪悪感、恥など) を引き起こすがゆえに語られないままに置かれてきた記憶に触れ、他者と共有できる形を生成することを意味する。その「形」は、多くの場合、語られた言葉であるが、言葉の揺れや、表現困難性を表す言葉や、あるいは言葉に伴う表情、身体反応等、言葉以外のものも含まれる。本

書第一章で小倉康嗣氏が論じる描き手と語り手の相互的交流による描画もその「形」のひとつである⁽⁶⁾。

ドイツのプロジェクトを受け継いで、本プロジェクトが歴史学と心理学 (臨床学) それぞれの専門家の共同によって実施されたこと、特に、心理療法の知見を背景に持ったことが、聞き取りにおけるトラウマ記憶の視点を際立たせることになった。歴史学におけるオーラルヒストリーの聞き取りについてはすでに相当の経験の蓄積がある。しかし、そこに「トラウマ記憶」の視点を持ち込んで方法論が検討されることは少ないと思われる。本論はその空白を少しでも埋めることがここの目的である。

二、自伝的記述の方法

本論では、「戦争の子ども」プロジェクトで行ったインタビュー調査と心理療法のそれぞれから一事例を報告し、特にトラウマの観点から内容を検討する。全対象者は、前者三〇人、後者三人であり、前者が多数を占めるが、ひとり当たりの情報量、関わりの量は後者が多い。前者の全体像についてはすでに発表している (藤原、二〇二二)。まず、それぞれの方法のあらましを述べる。

インタビュー調査は、前述のドイツのプロジェクトで用いられた様式に倣い、一回二〜三時間の半構造化面接 (あらかじめ準備された主題、質問のスケジュールに沿いながらも、対話の流れによって柔軟に対応する面接方法) によって実施した。面接に用いるインタビューガイドは、ドイツで用いられた質問項目の翻訳をベースにして、私たちの関心に従ってトラウマに焦点を当てる質問を追加した。ただし「トラウマ」という語は対象世代の方々に馴染みにくいことから、「最もつらかった体験」という表現を用いた。その結果、空腹など典型的なトラウマ的出来事とは見なせない辛い体験が語られる場合もあったが、多くの場合、あ

る特定の事件という意味でのトラウマ的出来事が語られた。

心理療法の試みでは、第二次世界大戦を経験した世代を対象として開発された治療技法、「統合証言療法 (Integrated Testimony Therapy: 以下、ITT)」を行った。手紙、ファックス、メールなどの媒体を用いて、治療者との交流を通じて「自伝」を作成する治療技法である。治療を受ける場を近隣地域に持たない人、身体疾患等で外出できない人、匿名で治療を受けたい人なども対象にすることを目的に開発された技法である。ITTでは、あらかじめ決められたスケジュールに従って、一〇回程度の執筆によって戦争体験を含む自伝を執筆する。執筆者は一回ごとに治療者に自伝を送付し、治療者は自伝へのコメントと次回の執筆へのインストラクションを返す。この作業を週二回のペースで行って、自伝の完成に至る。つまり、オーラルな様式ではないが、治療者との対話的な作業による執筆である。また、名称にある通り、「証言」の性格を持つことが治療機序に組み込まれている。

戦争体験を含む自伝は多数書かれて来たと思われる。しかし、トラウマ体験が含まれる場合、自発的に一人で行う執筆による証言化にはトラウマ記憶の性質に由来する原理的な困難がある。言語化を避けてきた記憶に向き合い、言葉にしようとする、記憶に伴う恐怖、不安などの情動に襲われる。情景が鮮明に脳裏に浮かび、身体反応も起こるのである。考えたくない思いに支配されるかもしれない。そうした反応が起こるのがトラウマ記憶の特徴である。そして、書く試みによって発生する反応によって執筆を中断すると、再開したときの反応がさらに大きくなる。その結果、執筆の全体を放棄する、トラウマ体験を含む箇所を回避して書き進める、直面を避けながら書ける程度にぼかしたり装飾したりする、などの選択がなされるだろう。ITTは、治療に対する動機づけを基盤に、あらかじめ決められたスケジュール及び時間枠に則った執筆と対話的交流によって放棄や回避を防ぐことができるのである。

三、……自伝執筆事例

ここで紹介する執筆者は、お名前を徳田勉美さん⁽⁸⁾と言う。心理療法の報告では匿名とするのが基本だが、すでに他の箇所でも体験を語っておられ、名前の公開をご本人が承諾されているので、実名で報告する。

昭和八年生れの男性で、ITTの実施当時七七歳である。スポーツ新聞の通信記者などを経て、現在無職（以下、執筆時を現在として記す）。歴史系研究所における体験の聞き取りに参加したことから、本プロジェクトのスタッフであった人見佐知子と面識が生まれ、ITTに参加した。心理療法を受ける上での主訴には、戦争体験に起因する悪夢、夜驚発作があった。夜中に叫び声をあげて起き上がり、二〜三時間硬直状態が持続するが、覚醒後に発作時の記憶はなかった。

ここで紹介する執筆箇所は、徳田さんの中に長くトラウマ性記憶を残すことになった大阪空襲後の体験である。対話的な執筆の一端を示すために、前回の執筆に対する治療者のフィードバックを次に示す。次回に対する教示も含んでいる。前回は、空襲の大阪から母親とともにからも逃げ出した体験を扱っていた。

徳田様

空襲の中を命からがら叔母様のお宅まで逃げられた体験を読ませていただきました。防空壕から出るといふ決断を、お母様もその理由がわからないとおっしゃったとのこと、本当に紙一重の脱出であったことがわかりました。

記憶のない部分について「放心状態」であったのだろうという推測は、まさにそのとおりなのだろうと思いました。ご自身命の危険を感じ、また凄惨な光景を多数目撃されたことでしょうが、放心状

態が恐怖やショックを和らげられてくれたのかと推測しましたがいかがでしょうか。もしそうであれば、命の危険が去った後に訪れた焼け跡の光景のほうが、強い恐怖やショックを感じられたのかもしれない。

続きの部分についても、書き方は前回と同様です。繰り返しになりますが、同じ説明を下に書かせていただきます。

当時の状況にしっかり集中してください。何を経験したか、何を目撃したか、何を聞いたか、どんな匂いがしたか、何を感じたか（不安、悲しみ、絶望、混乱……）、体の反応（たとえば、手の冷たさ、心拍、吐き気、震え……）などです。何度も何度も頭に浮かび、夢に出てくるような場面がありましたら、特にその部分に集中してください。その際、正確な出来事の順序はそれほど重要ではありません。もし、ある出来事から別の出来事に飛んだとしてもかまいません。それよりも、その状況で感じたことに注意をむけてください。その状況で、何を考え、何を恐れたでしょうか。特に重荷になったり、恥ずかしかったりしたような感情や考えに注目してください。今まで一度も話したり触れたりしたことのない体験がありましたら、特にその部分をしっかりと扱うようにしてください。今回も、まず二、三分時間をとって、その時代に気持ちを集出し、体験が目に浮かぶようにしてから書き始めるといいでしょう。そして、四十五分間、できるだけ詳しく書いてください。

次回で空襲体験の最後まで書いていただくことを目指しておりますが、時間不足のために省略することは好ましくありません。今回のように内容に集中していただき、もし空襲体験の最後に到達できなければ、さらに一回使っていただいても結構です。

（後略）

これを受けて書かれた次回の自伝のうち、体験の記述の部分を中心に抜粋する。

ナンバから徒歩でしたが、とにかくものすごい情景でした。目につくのは、コンクリート造りのビルなどと、蔵しがなく「ガレキ」の山で、まだ煙がくすぶっているものもあり、白塗りの蔵も炎と煙で、真黒になっていました。

（中略）

とにかく防空壕に残っていた人達の安否をと、いうことで焼け跡を探しました。一面焼けてなにもなくなっている焼け跡は、道路（遊廓の並んでいた道）は判るのですがどこに我が家があったのかさっぱり判りませんでした。

たまたま我が家では、お女郎さん達の写真を飾ってあった飾り棚が、大理石で造作してあったので、この大理石が目印になりやっと思つかりました。焼け残った材木・コンクリート片・トタン板などを取り除き、防空壕の所在を見つけ、一メートル角位のタイル張りコンクリートの蓋をこじ開けたとたん、熱風が出て、なんとも経験したことのない、異様なにおいがしました。うすい煙がなくなつて内部が見えた瞬間、黒いかたまりがいくつも見ええました。真黒に焼け焦げた遺体が折り重なっていました。手をにぎりしめ上に突き上げている遺体。人をかきわけているような遺体。壕の壁をかきむしっているような遺体。上向きで横になり両手をにぎりしめ上に突きあげてる遺体。とにかく性別も判らない程、焼けて真黒に焦げていました。とにかく地獄絵そのものでした。

当時の私は小学五年、この年令のものにはあまりにも強烈すぎる情景でした。たゞ呆然として、おせんさん（乳母・筆者）のモンペをにぎりしめ泣き出したそうです。この情景が六十年余を経た私の脳裏にはつきり焼きついています。